

まえがき

高度経済成長期の過疎地域からの急激な人口流出を「第一次過疎化」と呼ぶとすれば、現在、過疎地域においては、自然減少を主因とする「第二次過疎化」の時代を迎えている。「第一次過疎化」が大音響をたてながら一挙に進んだ「地滑り的な」人口減少であったのに対して、現在進行する「第二次過疎化」は年老いた人々が過疎地から「消えてゆく」静かな人口減少の時代を迎えている。

集落消滅の危機を前にして、過疎地域ではさまざまな活性化の試みが真剣に行われている。それは、「地域の危機感」が深いほど、活性化の動きも活発となる。こうした過疎地域の活性化の進行状況を調査し、そうした過疎地の活性化の動きに地方都市がいかなる役割を果たしうるのかを検討するのが、本調査研究の目的である。

後述のように、東北三県の都市と過疎地域の分布図を作成してみると、都市に隣接する市町村であっても過疎地域となっている。その意味で、過疎地域は都市からの遠隔性という観点からのみ考えることはできない。では、過疎地域にとって、都市はどんな意味があるのであろうか。

「過疎活性化に果たす地方都市の役割」というテーマを研究しようとする場合、二つの方向からのアプローチが可能である。第一のアプローチは、地方都市に視点を据えて、地方都市が過疎地域にいかなる機能を提供してゆくのか、を明らかにするものである。第二のアプローチは、過疎地域に視点を置いて、過疎の活性化の実態を調査し、その上で、過疎の活性化という地域的な努力・試みに対して地方都市がいかなる役割を果たしうるのか、あるいは、過疎地域から都市にいかなる機能を求めるかという問題を研究することである。

本調査研究は、過疎地域に視点を置いて研究を進めた。もちろん、理想論からすれば、上記の二つのアプローチを統合することで、表記の研究テーマを調査することが理想である。しかし、限られた期間内で研究をすれば、どちらかの方法を選択せざるを得なかった。